



心筋梗塞(しんきんこうそく)

梗塞とは、組織に血液を供給する動脈が閉塞することで、組織が壊死を起こすことをいいます。心筋梗塞は、冠動脈が閉塞することで心筋が壊死した状態です。心筋梗塞の年間発症者数は93,000人で、生存率は60%程度、つまり40%の37,000人が年間亡くなります。

今年最後の号は、寒くなると多くなる心筋梗塞について解説します。

原因

体の組織が活動するために必要な血液を供給するのが心臓ですが、心臓が活動するためにも血液は必要です。心臓に血液を供給する血管を冠動脈といい、右冠動脈と左冠動脈の2本あります。この冠動脈に動脈硬化が起こると、血管がだんだん狭くなっていきます。動脈硬化は、血管の中に悪玉コレステロールといわれるLDLコレステロールが蓄積していくものです。蓄積して瘤のようになったものをプラークといいます。このプラークが大きくなるにつれて冠動脈の中が狭くなり、75%以上狭くなると狭心症を起こします。狭心症は、心臓がバクバクするような労作を行ったときに冠動脈に狭窄があると、心臓への血液の供給が不足して“狭心痛”という胸の痛みが出る状態です。昔はこの狭心症の状態がさらに進行して血管が閉塞することで心筋梗塞になると考えられていました。

しかし、現在ではこうして発症する心筋梗塞は少なく、狭心症を起こす前の50%程度の狭窄の状態、プラークに傷がついて血管の内側の皮が剥がれることにより、そこに急速に血栓を形成して冠動脈が閉塞することで発症することが分かっています。(図1)

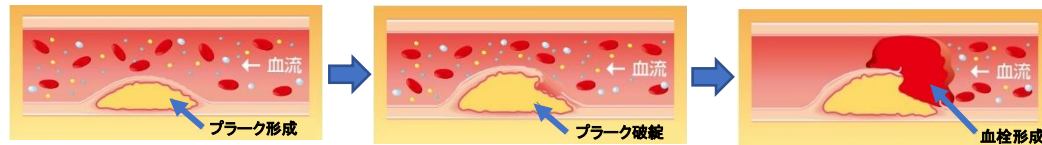


図1 心筋梗塞発生機序：プラーク破綻と血栓形成

症状

胸痛ですが、痛いというよりも、ギューッと胸を締め付ける感じ“絞扼痛”や“圧迫痛”を訴えられます。大の大人が「ウー」と唸ってしまうような、「ただ事ではないことが体に起こっている」と重症感を自覚するような痛みです。

狭心症から進行して心筋梗塞になる場合は、狭心痛という、胸痛の程度が少し軽く、安静にすると数分で治まる前駆症状があり、狭心痛の頻度と程度がだんだん増していくのですが、プラークが傷つく“プラーク破綻”によって起こる心筋梗塞は、狭心痛の前駆症状がなく、いきなり重度の胸痛に襲われます。

治療

冠動脈インターベーションが行われます。まず閉塞している冠動脈に細いワイヤーを通します。そのワイヤーを伝って先端に風船が付いた、バルーンカテーテルを閉塞部に誘導し、風船を拡張させて閉塞を解除します。その後ステントといわれる金属製のチューブを別のカテーテルで誘導して患部に留置して再閉塞を防ぎます。(図2)

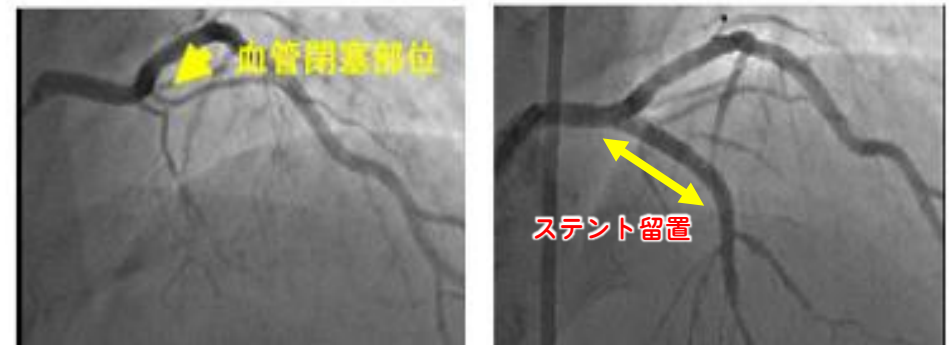
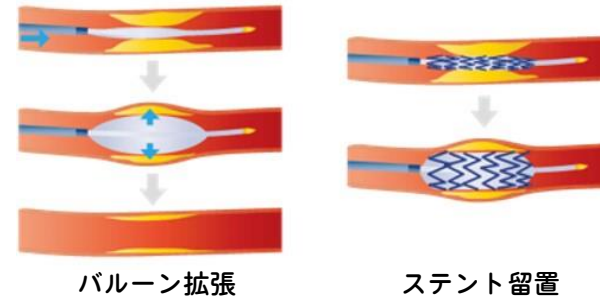


図2 冠動脈インターベーション：閉塞した冠動脈が開通している。

予後

心筋細胞は再生しないので、壊死した部分は元に戻りません。したがって予後を決めるのは、閉塞した部位が冠動脈の根元に近いほど梗塞の範囲は広くなり、インターベーションを行うまでの時間が早いほど救える部位が多くなります。